



泉洋書房  
3,132円(税込)

### カルチャー・ミックス

—文化交換の美学序説—

岡林洋一(おかばしち) 編著

本書「カルチャー・ミックス—文化交換の美学序説—」は、同志社大学人文科学研究所からの出版助成を受け研究叢書第35号として出版された。同研究所で我々は第10研究において2010年度から2012年度まで『モノ』カルチャーによる日米交流のテーマで研究を行っており、本書はその研究成果である。編著者の岡林洋一ははじめに「第一部第一章「昭和二年日米人形交流とシドニー・ギューリック」において、研究会で「モノ」カルチャーによる日米交流のテーマが本書のサブタイトル「文化交換」に発展的に継承されていく経緯が説明される。



法律文化社  
2,808円(税込)

### くらしのなかの文化・芸術・観光

—カフェでくつろぎ、まちつむぎ

井口貢(いぐちこう) 著

可能であれば中高生にでも、いやむしろ中高生にこそ読んでもらえればという想いが本書を執筆するひとつの大きな動機となっています。文化や芸術は決して難解なものではないということ、あるいは観光についてもお金をかけなければできないという大々的な「物見遊山」や「仕掛けづくり」ではないということとを、若い人たちにこそ先ず理解して欲しかったのです。私たちは日々日常を普通に暮らしており、その日常性の構造のなかのふとした瞬間にも幸福を感じることができなければなりません。柳田國男(1875〜19

同じ第一部第二章では我々の研究が国際的な文化交流を「グローバル・アジアの文化交換」まで発展させたことが告知される。日米から、国際交流は日本をグローバル・アジアの中に編入、日台の交流や、中国からドイツ、ドイツから中国へと交流は交換へと姿を変えることになる。この国際的文化的交流から文化交流の美学への展開が具体的に考察されたのが、第二章「文化交換の美学—ドイツ・中国両文化圏における歌への疎外を事例として—」である。ここでは交換両地域間において、これまで蓄積されてきた美学研究の諸概念、例えばドイツの演劇家ブレヒトの異化概念が、中国の少数民族のトン族による音楽の妨害的機能の解明と解釈のために積極的に用いられる。同章の4「ベンヤミンから見る現代日本文化」では本学の村上真樹博士によってドイツ美学の文脈からあのオタク文化の「キヤラ」概念が取り出されている等、同書の執筆陣の担当箇所は読者にとって楽しめるものとなっている。

著者より

62)が、「経世済民」と「学問救世」を旨に、生涯をかけて希求した私たち「常民」の幸福は、まさにそこにあるのではないでしょう。政策として文化や芸術、そして観光を考えるとときにこそ、このような柳田の視座を今一度、若い人たちにこそ確認してもらいたいと思えました。ファストなまでに刻々と変容する「流行」(例えば、「ゆるキャラ」や「B級グルメ」という言辭と発想)の渦に飲まれ翻弄されてしまいがちな現代社会です。その今を生きる若者たちにとって、「流行」を追うことを否定はしませんが、併せて「不易」であることの大切さをも想い、現代の古典とも言える柳田の思想を手がかりにしながら、あるいは柳田の影響を受けた人や同時代の思想家たちの思索の跡を咀嚼することは、グローバル化した地域社会のなかで生きるうえでも、それはゆるキャラ以上に素敵な一助となるのではないかと念じたのです。

著者より



雄山閣  
3,024円(税込)

### 日本列島人類史の起源

「旧石器の狩人」たちの

挑戦と葛藤

松藤和人(まつたけひと) 著

旧石器発掘捏造事件から十数年、前期旧石器研究の重い扉は、静かな、しかし力強い歩みによって開かれつつある。この先鋒をつとめる著者が、これまでの道程とこれからの進路を指し示すのが本書である。

本書は国内の前期旧石器関係遺跡について、研究経過と課題を解説する。学史がコンパクトにまとめられ、初学者にも読みやすい。本書が初公開となる写真やこだわりのカットも理解を助ける。本書の大きな魅力であろう。前半部では青森県金木の偽石器など、類書では詳述されない事項にも紙幅がさかれ、研



平凡社  
1,620円(税込)

### 辣(ラー)の道 トウガラシ25000 キロの旅

加藤千洋(かとうちひろ) 著

わたしの旅の作法の一つは、初めての土地では必ず市場を訪ねることだ。新聞社の特派員として通算7年駐在した中国大陸でもそれを実践した。

その土地の庶民の胃袋に収まる食材があふれる生鮮市場が面白い。目で見て、舌で味わい、売り手と買い手の会話を耳でも楽しんだ。そして、なぜか特別に興味を引かれたのが唐辛子。辛い料理の本場の四川省、シルクロードや朝鮮族が多い東北方……多様な種類を知り、多彩な料理を味わった。

究者にも読み応えがある。後半部では、学界にホットな成果を提供し続ける出雲の前期旧石器研究が紹介される。特に砂原遺跡について、調査者である著者がなぜ前期旧石器遺跡と見るのか、丁寧な説かれ、『砂原旧石器遺跡の研究(2013年)』の普及版的役割を果たす。本書には遺跡の発見・研究・情報公開に真摯に取り組む科学者としての姿勢と、その一部始終を後世に残そうとする歴史家としての生き様が通底している。

もう一つの魅力は、エピソードに垣間見える先学諸賢ならびに著者の、考古学にかける情熱である。この思いに触れるにつけ、背筋が伸び、研究への活力をかき立てられるのは怠惰な評者ひとりではないだろう。副題の由来となった藤森栄一の名著『旧石器の狩人』(1965年)が多くの人々を考古学へ誘ったように、本書を読んだ学生たちは旧石器研究に強く惹かれるはずだ。じっとしてはられない。私も狩りの支度をはじめることしよう。

上峯篤史(かみねあつし) 天文学部嘱託講師

そんな体験談を、ある時、テレビ局の知人に話したところ、それスベシヤルでやりましょうよと即決。企画に一本筋を通すため、南米原産の香辛料が、いつごろ中国大陸に伝来し、どう広がっていったかというストーリー仕立てとなった。

結果、車を使って25000キロ、11日間の大陸行に挑戦したのは3年前の夏休み。一日で700キロの移動もあったので、節々が痛み、激辛料理の連続に胃袋もおおいに疲労する過酷な旅ではあった。でも楽しかった。そんな体験を知ってもらいたいとテレビ番組とは別に、自分で撮った写真やスケッチも加えて書いたのが本書である。それに京都の唐辛子の風景なども若干加えた。

日中関係厳しき折に、毒にも薬にもならない内容で申し訳ないが、こうしたスパイスも、隣国の素顔、多様な生活文化を知るには必要ではないだろうか。

著者より



筑摩書房 799円(税込)

### 子どもが伸びる ほめる子育て

データと実例が教えるツボ

太田肇(大学政策学部教授)著

近年「ほめてやる気を引き出す」「ほめて伸ばす」子育てが目されるようになってきた。しかし、その効果を裏付けるしつかりとしたエビデンスはきわめて乏しい。このような現状を踏まえ、ほめることの効果を実証するとともに、それに基づいた具体的なほめ方を示すことを目的に執筆したのが本書である。筆者はこれまで企業の従業員や病院の看護師などを対象に、承認すなわちほめたり認めたりすることの効果について、いわゆる「ビデオ・アフター」の方



成文堂 7,020円(税込)

### 刑事裁判覚書

裁かば裁かれん 念ずれば花ひらく

佐藤嘉彦(大学司法研究科教授)著

本書は、裁判官に、広くは法曹に求められる「心・智慧(heart and wisdom)」と「技術(skill)」を、裁判官としての実務経験と無尽蔵の教養とを糧にして語っている「裁判の書」である。著者の思う「心・智慧」を言葉にしたのが副題「裁かば裁かれん 念ずれば花ひらく」である。前段の由来は、吉川英治『大岡越前』中の「人間二神ノ裁キハ難シ。人間方人間ヲ裁クノ畏レヲ常ニ想ヘ。裁カバ裁カレン」である。裁く「畏れ」といかに向き合うか。板倉重宗(京都所司代)にみるように、「私心を捨て去つて」事に当たり「事件に集中する



現代人文社 2,376円(税込)

### 裁判員のあたまの中 14人のはじめて物語

杉田宗久(大学司法研究科教授)他著

国民が刑事裁判に参加する裁判員裁判が2009年に始まって5年が経過した。裁判員制度はわが国において定着しつつあるといつてよいが、一方で、裁判員に守秘義務が課せられていることもあり、裁判員裁判の実態はそれほど知られていない。本書は、14人の裁判員経験者に對するインタビューの内容をまとめたものである(本書の編著者である田口真義氏自身も裁判員経験者であり、この14人には田口氏も含まれている)。裁判員選任手続、公判、評議、判決そして裁判後に至るまでの様々

法で研究を重ねてきた。そして本書では、幼稚園児、中学生、高校生を対象に同様の方法で行った研究の結果を紹介している。研究によって判明したことは、親や教師が子どもを的確に承認した場合、子どもの自己効力感が高まり、勉強が充実したり得意なものが増えてきたりするということがある。また大学生を対象にした調査では、ほめられた経験が伸びるきっかけになっていたことも明らかにされた。さらに各地の学校で行われた実践例からは、ほめるための場をつくるとともに、条件に応じてほめる方法を変える必要があると分かった。人を伸ばし、育てることは家庭や教育現場だけでなく、企業その他の組織においてもこれからはますます重要になっている。本書で述べた内容の多くは、企業の人材育成などにもそのまま当てはまるはずである。

著者より

な場面に関する裁判員経験者の本音が、それぞれ自分の言葉で詳細に語られている。

また、本書には、14人のインタビューの後に、杉田宗久司法研究科元教授をはじめとする専門家のコメントが寄せられている。杉田元教授は、本学責任前大阪地裁の裁判長として、裁判員制度施行前から施行準備に深く関与されるとともに、施行後は多数の裁判員裁判やその公判前整理手続を担当され、文字どおり裁判員制度を最前線で行き引かれてきた。そうした経験をともに、14人のインタビューに対する感想や、裁判員裁判を進める上での様々な工夫、提言が具体的に述べられている。

本書を読むと、一口に裁判員裁判と言っても事件や裁判体によつて手続の進め方や手法に違いがあることを改めて認識させられる。裁判員裁判の実態を知る上で本書は貴重な一冊である。

十河太朗(大学司法研究科教授)



岩波書店 2,025円(税込)

### 脱「成長」戦略 新たな成長国家へ

橋本俊詔(大学客員教授)他著

第二次安倍内閣は「アベノミクス」のローガンの下、年率2〜3%の経済成長戦略を打ち出している。日本は出生率低下による少子化現象の時代にある。これは労働力不足と家計消費の低下を招いているので、経済成長率は負を選択していることを意味する。生活水準の低下を促す負の成長率はさすがに好ましくない。それをゼロ成長率に上げるといふ成長戦略なら容認するが、それを2〜3%にまで上げるといふ戦略は悪い副次効果があるので避ける方がよい。それが本書の主張する脱・成長戦略である。世界の経済学界で

ことだ。——どうすればそれは可能か。「念ずれば花ひらく」(坂村真民)、「花開けば必ず真実を結ぶ」(道元禪師)。これが著者の答えである。「念ずる」は「精進」とか「修行」と言いかえることができるだろうか。著者のつみ重ねるもの全てを知ることに向けられている。本書には、芦東山「無刑録」から大衆歌謡の歌詞まで古今東西の著述等々が次つぎ登場する。全て、著者の年月をかけた「修行」の証である。念じて結ばれた「真実」が「技術」で、「事実認定」「刑の量定」「証拠法上の問題」「二事不再理」を本書は扱っている。残念だが、「技術」の切れ味を伝える字数はもう残っていない。

岩野英夫(大学法学部教授)

読者は、本書のなかで、親しい隣人のように感じられる「プロの裁判官」に、また現場感覚一杯の平易な「心・智慧」「技術」に出会うだろう。特に法曹をめざす人はこの書をぜひ手にしてほしい。

成長を叫ぶのはアングロサクソン系であり、脱成長は仏・伊などのラテン系である。どのような副次効果かと言え、(1)既に働き過ぎの日本人の労働時間をさらに長くしてしまう。(2)戦略特区は東京・大阪・名古屋地区の大企業の活性化を目指すので、ますます地域間格差を助長する。(3)資源・環境問題にあれば留意しようとしていたのに、高成長政策はそれを悪化させる恐れがある。3.11のようなことが再び起きれば日本は沈没しかねないところ、高成長のために原発再起動が計画されている。今は原発ゼロの下、低成長率で十分日本人は生活できているのである。国民の最大の関心は少子高齢化による将来の社会保障制度への不安にある。このことに無関心な成長戦略は、結局のところ日本人を不幸に陥れるだけであり、本書では社会保障制度改革を具体的に主張・展開するものである。

橋本俊詔



昭和堂 7,128円(税込)

### 技術と身体・民族誌 —フィリピン・ルソン島山地 民社会に息づく民俗工芸

大西秀之(女子大学現職教授)著

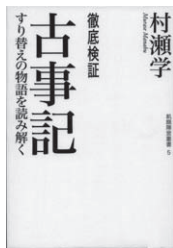
技術は、個々人の日常生活から国際社会の政策・動向に至るレベルまで、現代社会に多大な影響を及ぼしています。このため、技術と社会の関係性は、今日、一般社会のなかで日常的なトピックとなっています。ただ、そのような社会の関心に対し、人文社会科学を中心とするアカデミズムの側が十分な回答をしないままに窮せざるをえないのではないのでしょうか。

こうした状況を踏まえ、本書では、フィリピン・ルソン島山地民社会の民俗工芸を対象とし

て、その技術を追究しました。その結果、まず現地の人びとが行っている知識や技能が、容易には可視化や言語化しえない特徴を有していることを指摘しました。その上で、民俗工芸に対する開発事業や近代化が、ジェンダーの変容という思わぬ影響を現地社会に及ぼしたことを明らかにしました。こうした検討を通し、最後に、近代テクノロジーを再考するとともに、現代社会において技術研究を行う意義を提起しました。

本書は、近代社会の中核ではなく周辺に身を置いて、技術と社会の関係性を読み解いたものです。いうまでもなく、近代科学に基づくもののみが、人類にとつての唯一の技術ではありません。そういった意味で、先端技術に代表される「近代テクノロジー」や「科学技術」を相対化するような、技術と社会の関係性をめぐる新たな理解を提示できたと考えています。

著者より



言視舎 2,376円(税込)

### 徹底検証 古事記 —すり替えの物語を読み解く

村瀬学(女子大学生活科学部教授)著

古事記上巻の神話は、従来から「稲作の神話」とされてきたが、そういう見解に否を唱え、そうではなく「鉄の神話」であること主張したのがこの論考です。古事記のはじまりは、イザナキとイザナミが、「高天原」から「矛」を授かり、それで海原をかき混ぜて「国」を作ったという設定になっているのですが、ではなぜ「高天原」に、そんな矛＝金属が最初からあったのか疑問が出てきます。古事記の作られた時代背景を探ると、「日本」という国家が成立していく時で、当時の統治者が最も苦心して手に

入れていたのが、武器や農具のための「鉄を作る技術」だったことがわかります。「鉄」を作るには「鉄の材料」と「高温の火」を作る技術を手に入れなくてはなりません。その鉄を手に入れる苦労を物語化したものが古事記だったと考えると、従来の読みでは見えてこなかった古事記の、よく考えられた大変興味深い側面が見えてきます。イザナミが火の神＝カグツチを生む過程はまさに鍛冶屋が鉄を生む過程にそっくりです。「死者の国」とみなされてきた「黄泉の国」も、そうではなく「高天原」と敵対する地方の勢力の鍛冶場の描写として見えてきます。そこから「鉄」を支配したい「高天原(ヤマト王権)」と、隠れて鉄を作る「地方の家族」との争いが見えてきます。そんな中で「スサノオ」や「オオクニスシ」の物語を読み解いていくのは大変スリリングな読書体験になるものです。

著者より



大修館書店 1,620円(税込)

### 保健体育教師になろう!

—不安に陥る現役教師からのアドバイス

伊藤博子(高等学校保健体育科教師)著

保健体育の教師である前に、その学校の教師であることが求められます。教育課程である体育と保健の授業はもとより、道徳(中学校)、特別活動、総合的な学習の時間の指導のほか、生徒指導、進路指導、部活動指導、クラス担任としての業務や保護者対応等で、その専門性を発揮していくこと。それが教師の喜びにつながっていきます。したがって、教師になるために勉強するのではなく、教師としての資質・能力を高めるために学ぶ

のであり、このことが根本になければなりません。

そのために本書は、著者が経験豊かな現役教師の立場から、公立私立の両方を視野に入れないながら、学生や大学教員では窺い知れない内部情報や教師としてのあるべき姿等を可能な限り紹介をしているということから、他に例を見ない著作と言っても過言ではないでしょう。ここに示された内容等を把握しつつ、教職に関する理論と実践力を高めていくことが成功の秘訣となるでしょう。

本書が、保健体育の教師を目指すしている人の指針となることを願って推薦の言葉とします。  
本村清人(東京女子大学体育学部教授、日本体育学会会長)



思文閣出版 2,052円(税込)

### 裏のライフは私のライフ

—新島襄を語る・別巻(四)

本井康博(元大学神学部教授)著

本井康博先生、「八重の桜」の時代考証でご苦労なされた先生ならではの貴重なお話、ドラマの名場面・名台詞をなつかしく思い出しながら、聴き入りま

まず、表紙の「竹」の絵。七五三太少年が画帳「四君子図」に描いたものと知り、黒豚を描いていた七五三太が逃げた黒豚を追いかけるシーン(第2回「やむにやまれぬ心」)を思い出しました。七五三太が象山塾で覚馬や尚之助と遭遇するという大胆な創作でした。

熊本バンドの面々への「ここはあなた達の学校です。教師任

せにしないで自分達で変えていけばいい」という八重の台詞(第37回「過激な転校生」)が、実は、ジェーンズの言葉だったとか。さすがはジェーンズ先生と感服しました。

同志社卒業式での覚馬による「こんな時でも、貧しい人々の友となり、弱いものを守る盾となってください」という台詞(第49回「再び戦を学ばず」)が実際の式辞を脚色したものであることを知り、これまた感動です。

安中教会で行われた、裏についで八重のスピーチに基づく『自由を護った人』(作:村上元三、1947年)という放送劇もぜひとも鑑賞したいものです。

本井先生には、今後、新島夫妻や熊本バンドの面々が登場する小説・戯曲の類についても、史実と照らし合わせながら大いに語っていただきたいものです。書名の「裏のライフ」は私のライフの「私」とは、八重のことですが、本井先生ご自身のことでもあると、わたくしは理解しました。

大島中正(女子大学表象文化学部教授)